

	学位記	文科省報告
2004	3889	甲 ②1915

博士論文概要

水谷 誠

本論考は、『集韻系韻書の研究』と題して、主に『礼部韻略』と『集韻』とについて、文献学的な手法により、考察したものである。詳細は、本論に譲ることにして、この概要においては、Ⅰ本論考の前提について・Ⅱ要約的な概要・Ⅲ将来の展望について、の三点を述べることにする。

Ⅰ本論考の前提について

本論考の研究史的な位置づけをまずしておきたい。細かな叙述は省くが、20世紀における切韻系韻書に関する研究は、実にめざましいものがあつたといえることができるであろう。『切韻』以前から、原本『切韻』の姿、増補の様子、そして『大宋重修広韻』へと、それぞれの段階において、めざましい業績を数えることができる。これらの成果によって、中古音の解明ばかりでなく、上古音への足がかりにまでなつたことは、学問の進展を実感させるものといえるであろう。一方、『大宋重修広韻』以後においても、『中原音韻』によって代表される近世音に到る面でも多くの業績があつた。こうしてみると、『大宋重修広韻』は中古音の集大成と同時に分水嶺でもあつたことが、このような簡単な研究史上の回顧からも容易に見て取れるであろう。それでは、『大宋重修広韻』とほぼ同時に成立した『集韻』についてどのような音韻史上の位置づけができるであろうか。

『集韻』は、『大宋重修広韻』に倍する所収字数をもつ韻書である。この『大宋重修広韻』に倍するという点においてか、研究上『大宋重修広韻』と比べて、『集韻』はあまり取り上げてこられなかつた。この外にも、反切の改変や開合の問題等々で切韻系韻書からは逸脱するような点もあり、この点で魅力を減少させることになつたのかもしれない。このような欠点を考慮にいれても、『大宋重修広韻』のすぐ後に『集韻』が編纂されたことはまちがいない。しかも、その後連綿と現代に至るまで散佚せずに伝えられてきたのである。この点で、一時、稀観本となつた『大宋重修広韻』よりも重要視されてきたものと思われる。研究史において「仮に」ということばはあまり使いたくはないが、仮に『大宋重修広韻』が散佚して『集韻』が残つたとしたら、切韻系韻書についての考察もかなり違つたものとなつたであろう。あるいは、今日定説となつているものも未解明であつたかもしれない。そうであるならば、切韻系韻書と対比する意味においても、よりいっそう『集韻』について、考察をすすめることは重要であると考えられる。

前提がかなり長くなつたが、北宋の真宗、大中祥符元年(1008)に『大宋重修広韻』が世に出ると、この書の改訂作業が比較的早く開始されたようである。この改訂作業には、さまざまな目的が複合的にあつたようである。なぜなら、一つは『礼部韻略』となり、一つは『集韻』となり、一つは『類篇』となつたからである。この三書とも、これまでの伝統的なものの形態から見れば、かなり「革新的」なものであるといえる。本論文は、『類篇』を除く、『礼部韻略』と『集韻』とについて考察するものであるが、この編纂過程において何を指したのか、そしてそれが実現されたのか、また実現されなかつたものはどのようなことになつたのか、という事柄についていくぶんなりとも回答を用意しなければ、研究史上の意義はあまりないといわざるを得ないであろう。もしこの点に関して、明確な回答が得られれば、『切韻』から『大宋重修広韻』に至る改訂がどのような方向性をもつていたの

か、またポスト『大宋重修広韻』でそれからどのような方向へ転換が図られたのかという重要な問題への有力なアプローチが容易となるであろう。本論考でのこの点への実現の程度について自己判断をなすことは差し控えるが、以上のような研究上の前提をもとにして、いることを述べておきたい。

II 要約的な概要

本論文は、「序」で概括した如く、第一部『礼部韻略』と第二部『集韻』とからなる。『大宋重修広韻』改訂の作業から生まれた両書には共通の要素もあるが、相違点も多々ある。このためそれぞれに分けて論じることとする。ところで、本論文で、「『集韻』系韻書の研究」と名付け、『礼部韻略』を『集韻』系韻書とするのは、そこで共通点に注目したからである。卑近な表現でいえば、兄弟韻書といってもかまわないものであるが、『集韻』によって代表される韻書群ということで、こう命名することによりこの韻書群の性格を明らかにすることができると信じる。

上記のように二部構成を取るが、最初に『礼部韻略』を置くのは、(『集韻』も含めた)『集韻』系韻書での骨格をこの『礼部韻略』が示しているからである。すなわち、『集韻』系韻書の音韻体系や基本文字を『礼部韻略』によって比較的容易に見て取れることができる。いわば、簡から繁へという順序で、構成を考えたと見なしてかまわないであろう。

さて、本論文の第一章は、『礼部韻略』での避諱による小韻削除の問題を取り上げている。ささやかな問題からスタートしているが、これがもっとも早く書かれたものである。いわば、筆者における『礼部韻略』と『集韻』研究の原点に当たるものである。これがなければその後の筆者の研究展開も異なっていたであろう。

削除された小韻に初めて気がついたときの新鮮な驚きは、本研究の出発点といえるものである。ただし、当時、研究の中心であった「増韻」(『増修互註礼部韻略』)に重点をおいた叙述となっている。今回、「増韻」についてはほとんど論及しないが、この「増韻」も重要な『集韻』系韻書であることはいままでもない。なお、ここでの研究において、『礼部韻略』が皇帝が代わるごとに改訂を経てきていることから、元の姿を知ることの重要性を認識することになった契機の論文であるといえる。

第2・3章は、真福寺本『礼部韻略』に関する文献学的な研究である。これによって、はじめて『礼部韻略』の当初の姿が、かなり正確にわかることになったと自負するものである。今後も『集韻』を含めた『礼部韻略』研究に真福寺本も視野に入れなければならないことはいままでもないであろう。第2章は、真福寺本の義注を除いた全体についてであり、第3章は、真福寺本の義注についてである。

第4章は、『礼部韻略』の成立をめぐる、どのように編纂されたのか、またもともとの姿はどのようなものであったのかという関心のもとに書かれたものである。ちなみに、本稿は、真福寺本『礼部韻略』を見る前に書かれたものであるが、ここでの論点に大きな変更は必要なかった。ここで論じたように『韻略』から『礼部韻略』への変更点がある程度わかることから、『韻略』の概略的な復元も可能であろう。今後、このような試みもしてみたい。

第5章は、『礼部韻略』の義注と『集韻』の義注は、同じ資料をもとにしていることを考査したものである。『集韻』では一部の書物以外に義注に引いた訓詁に書名を記すこと

はない。これとは逆に、『礼部韻略』では比較的丁寧に書名を記す。これと同じ扱いであるのが、又音の注記である。『集韻』には、又音の注記は全くない。これに対して、『礼部韻略』は厳密に注記している。このようにソースが同じである以上、『礼部韻略』の義注から、『集韻』義注の典拠がわかるのではないかと考えたのである。その考察の結果が、本章である。『礼部韻略』の所収文字数が少ないため、わずかな数でしかないが、両書の関係の深さが実感できることと思う。

第6章は、もともと中国語で執筆したもので、ここに収めるものは、その日語訳のものである。ここでの論点は単純であって、『礼部韻略』は韻図の手法をもって小韻を並べ替えたというものである。例外は「養」韻の並べ替え忘れ、しかもここでの小韻の並べ方は『大宋重修広韻』と同じである。この点から並べ替え以前は、『大宋重修広韻』と同じであったことが予想される。以上の点を論証する。この中でも特に興味深いのは、一二四等韻での並べ替えは、字母数が少ないため基準となったであろう規則に則って混乱があまりないが、三等韻においてはかなりの混乱が見られ、どのような原理原則で並べられたのか判断に苦しむことである。

以上、『礼部韻略』を中心として述べる。内容的には文献学的な関心のもとに、『礼部韻略』がどのように作られてきたのかという点を中心に述べる。このような関心は、次の『集韻』篇にも、受け継がれて叙述される。以下、第二部『集韻』篇に移ることにする。

第二部、『集韻』の叙述は、『礼部韻略』でのそれに比してより限定的なものとなっている。すなわち、『集韻』がいかに組み立てられ、いかに作られていったかという部分に限定されている。これは一見迂遠なようであるが、さまざまな材料を収集して作られた韻書である『集韻』を分析する上で、有効であると筆者は確信している。ただし、まだこのような分析が端緒についたばかりで、音韻学上、まだまだ十分な成果を出していないことを認めざるをえない。

第7章は、『切韻』では「真」一韻であったのを「真」「諄」に分離した後の扱いをめぐって、それぞれ扱いの異なる『広韻』『集韻』『礼部韻略』について相互比較した。とりわけこの三書での小韻順や反切などを考察した。紙幅や時間的に余裕がなかったため、どうしてこのような変化が三書三様に生じたのかという点に論及できなかったのかと反省材料もあることはあるが、入声での三書共通が意味するところをもあわせて考えることにより、『集韻』での改編が目指したものを考える材料を提供できたことはまちがいないといえる。また、『礼部韻略』がその中間段階の状態を示していることもおのずと理解されるものと考えられる。

第8・9・10章は、『集韻』編纂のための材料となった『經典釈文』と『群經音辨』をどのように利用したかを考察したものである。

第8章は、『群經音辨』を基準に『集韻』を考察したものである。『群經音辨』は『集韻』とほぼ同時期の出版であり、しかも『群經音辨』の勅牒によれば『集韻』の材料となるためのものである。このような条件のもとに、『集韻』『群經音辨』『經典釈文』を対照したものである。

第9章は、2000年の第6回国際音韻学シンポジウムでの発表原稿である。黄侃以来、『集韻』には『經典釈文』により大幅に増補されたとするが、増補の2万8千のうち、現

行の『經典釈文』から確認できるものは4千あまりにしか過ぎないことを述べる。

第10章は、第9章を受けて、『集韻』では『經典釈文』をどのように利用してきたかを述べたものである。ここでの考察によれば、『經典釈文』は『集韻』編纂時に二度にわたり引用されていることが確認される。しかも二度目の引用は小韻末に置かれる。ここでは触れることができなかつたが、『大広益会玉篇』による増補部分も小韻末に位置しており、この点で共通性があるといえる。

第11章は、『經典釈文』の散佚部分を『集韻』の義注によって確かめうるのではないかという問題意識で考察をすすめたものである。この問題意識のもととなったのは、注記で触れるように平山久雄先生の筆者への『經典釈文』散佚部分確認のための問いかけであった。幾つかの例からも、実際かなり『經典釈文』の散佚はありそうである。また、その餘録として、『集韻』義注の信頼性がわかることも言い添えておきたい。

第12章は、本書の掉尾を飾るものである。『大宋重修広韻』『大広益会玉篇』『集韻』を立体的に考察することにより、世代ごとの資料のやりとりを少しでも解明できればとの思いは今も続いている。ここでの考察から、『集韻』は『大広益会玉篇』での増補部分から増補字を得ていることがわかつた。現在、この資料収集はまだ途中であるが、巻23「犬部」までで3千例を得ることができた。この数値は『經典釈文』のそれより若干少ない数である。『集韻』では『大広益会玉篇』からの典拠が示されなかつたことから、これまで注目されなかつた増補例であるといえる。なお、このような増補は、宋代では『類篇』で切れるが、後の時代にどのように資料が受け継がれていったのか、また何が受け継がれなかつたのか、それを知るためのきっかけとなれば幸いである。

最後に、全体を総括し今後の展望を述べる「結語」、そして索引および『集韻』系韻書文献目録稿を置いた。

付録として、第二部の考察の基礎資料ともいうべき『広韻』未収『經典釈文』由来『集韻』所載字索引表をつけた。